

令和6年度 学校経営の改革方針

令和 6年 4月
鈴鹿市立椿小学校

I 教育目標

1 学校教育目標

「自ら学び、力を合わせてやりぬく子どもの育成」

2 目指す学校像

- (1) 学力を身に付けた子どもを育む学校
- (2) 心身ともに健康でたくましい子どもを育む学校
- (3) 命と人権を大切に、安心して楽しく学べる学校
- (4) 家庭や地域と連携・協働する学校

3 目指す子ども像

- (1) 進んで学習に取り組み、自己実現に向けて努力することができる子ども
- (2) 心身ともに健康で、課題を乗り越えようとする子ども
- (3) 思いやりの心を持ち、みんなと共に高まろうとする子ども
- (4) 地域に学び、地域と共に生きる子ども

鈴峰中学校区キャッチコピー

“ 地域とともにたくましくチャレンジする鈴峰の子 ”

4 学校経営方針

- (1) 学力向上のための指導方法の改善と指導力・ICT活用技能の向上
- (2) 心身ともに健やかな子どもの育成
- (3) 一人ひとりの自己有用感・肯定感を高め、共に生きる力を育成
- (4) 安全管理と安全教育の充実・徹底による安全・安心な学校の構築
- (5) 学校運営協議会の熟議を生かした学校運営、教育活動の充実、地域との連携による「地域とともにある学校」の創造

5 生徒指導方針

- (1) 生涯にわたり学び続ける基盤となる基本的な生活習慣、学習習慣の定着を目指し指導を行う。
- (2) 児童理解を深めることによって、一人ひとりの悩みや課題を把握し、解決に向けて子どもに寄り添いながら指導にあたる。
- (3) 生命の尊重や善悪の判断、規範意識などについて理解させ、行動化を図る。
- (4) 縦割り班活動を中心にした異年齢交流を通じて、思いやりの心や社会性を培う。
- (5) 家庭や地域、関係団体との連携を強化し、地域ぐるみで生活指導の充実を図る。
- (6) 問題行動の発生時には、教職員が一丸となってその解決に取り組む。
- (7) 不登校を生まない、安心できる学校づくりを行う。

Ⅱ 現状と課題

1 子どもの実態

児童は、全体的に素直で穏やかな気質である。全学年が単学級でありクラス替えがなく転出入も少ないため、子ども同士の関係は比較的安定しており、家庭的な雰囲気がある。しかし、裏を返せば、集団の中での人間関係がいったん固定化されてしまうため、周りとの関係を気にしすぎて自分の思いを十分表現することができなかつたり、個性を出し切れなかつたりする子どももいる。そのため、教員が集団におけるそれぞれの子どもの立場や状況をしっかり把握し、寄り添い、安心できる環境を整え、受け止めあえる仲間づくりを行っていく必要がある。また、様々な経験をさせることで、自信をもって、自分の思いや考えを表現できるように導いていく必要がある。

学習面では、与えられた課題には真剣に取り組む。さらに自主的・自発的に課題を見つけて解決できるような場面を増やし、学校生活のなかで総合的に学力を向上させていく必要がある。

2 保護者・地域の実態

同じ敷地内に三世代が同居する家庭が多く、昔からの慣習を重んじる傾向にある。価値観が画一的となる傾向があり、大人もそこから外れることを恐れる。子どもたちはそのような影響を受けているためか、思考の柔軟性に欠ける面も持っている。保護者は、地理的に放課後の習い事や通塾など遠方への送迎は大部分が容易ではなく、学習面では学校の指導への期待が大きく、学力より人間的な成長を期待する風土が強い。

地域は、連帯感が固いことも功を奏して、ボランティアとして学校の教育活動へ貢献することが楽しみでもあり、理解もあり協力的である人が多い。

3 学力の定着と指導の充実

(1) 自ら学ぶ力を育成するための授業改善・授業研究

① 授業改善と指導力の向上

- ・授業研究会を予定通り実施した。学年部による事前検討会、自主的な事後検討会を開くことで、再度研修のテーマや授業改善の課題が見えてきた。振り返りとともに自分化をした。
- ・交換授業、TT や複数の教員が授業にかかわる体制の中で、教員が互いに授業を見あう場面を多く設けた。
- ・学校運営協議会委員に授業公開し、アンケート等で保護者・地域の視点からの意見をいただき改善の一助とした。

「授業はよくわかるか」91.0→96.2% 「進んで発表する」77.4→78.1%
「話をしっかり聞く」92.8→95.2% (児童アンケート 12 月の結果)

② 基礎学力の定着

- ・「椿タイム」は年5回実施した。算数の基礎学力の定着と復習を兼ねて、前学年のドリルに取り組ませた。既習事項が網羅されており子どもたちも取り組みやすく、地域の学習ボランティアの支援を受けて進めることができた。
- ・「読み上げ計算」については、単元の導入時に必要に応じて活用した。
- ・読書活動、読む書くワークシートに組み込み、文字に慣れさせた。
- ・絵日記や作文指導等に継続して取り組み、文の構成や伝える力を育成した。
- ・漢字指導については多角的に学ばせ、チャレンジタイム等により定着を深めた。

③ 家庭学習の取組

- ・自主学習を家庭学習の一つと位置づけ、家庭と連携を図り実施した。
- ・家庭学習強化週間を年3回実施した。そのうち、3 学期は校区でも課題となっているスクリーンタイムの増加の解消につなげるため、「親子読書・メディアコントロール週間」とした。全く意識できない児童はいないが、目標時間を達成することは難しかった。家庭での生活を

計画的に過ごすことや、読書や自主学習を習慣づける指導が必要である。

家庭学習達成率78.4→76.4%(12月)と減少傾向
「家庭学習の習慣をつけているか」77.8→70.3% (12月保護者)と減少傾向
「家庭学習をしているか」86.5→87.7%(12月 微増)

④ 全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェックの活用

昨年度全国学力学習状況調査の結果より
6年生 国語 全国平均とほぼ同じ
算数 全国平均をわずかに上回る
昨年度みえスタディ・チェックの結果より(平均正答率%)
5年生 国語 三重県平均を上回る
算数 三重県平均を上回る

・国語・算数ともに改善がみられたが、問題文や資料を適切に読み取ること、引用、接続語、複数の条件を満たした作文など、操作性、思考力が問われる問題に課題があった。
・全職員での学力分析を行い、強みと弱みを確認し、研修課題を共通理解のもと、学びに向かう力を生かした授業改善を行った。

⑤ 英語教育・多文化共生教育の推進

・1、2年生は月1～2回のEEタイムで英会話と外国文化に親しませた。
・椿ワールドの開催に向けて、普段の授業で学んできた英語を使い発表することができた。
・校内放送の中に、日常的に日本語と英語を混ぜ込み、行事ごとには英語で歌う音楽等を取り入れたり、ALTの先生との英会話教室のコーナーを設けたり、全学年で英語に慣れ親しむ活動を行った。

(2) 読書活動の推進

・読書活動推進事業により学校図書館アドバイザーを派遣していただいたり、図書巡回指導員に指導してもらったりして、本に親しみ、図書室を訪れるきっかけ作りをしてもらった。出前授業、イベント企画、読み聞かせ、国語の授業にかかわる本紹介、本の選定、図書館整備、ブックトーク・「お話宅配便」の積極的な活動と、通信を通して家庭での読書活動の啓発を行った。

「普段から読書をする」児童は82.2→83.9%(微増)
図書館貸出冊数51→73冊(昨年度から22冊増)

(3) ICT活用の推進

・ICTサポーターに計画的に授業に参加してもらい、研修会を実施し、説明をうけたアプリを活用することができた。
・授業等で、児童が必要に応じて活用できる時間が大幅に増えた。高学年は連絡帳として、また、オンラインで中学校と交流し、積極的に関わろうとする態度の育成を図るなど活用の幅も広がった。

「クロームブックは楽しい」91→95.2%(12月)

(4) キャリア教育・地域学習

・「すずか夢工房」や「ゲストティーチャー」の招聘を全学年年間4回以上、計31回実施し、出会いを通じて「生き方」や「考え方」を学ぶ機会とした。(昨年比+3)
・発達段階に応じ、地域と連携した活動を行った。人の役に立ちたいという児童は多いが、「夢や希望」・「自己肯定感」については、少し低い傾向にあるので、今後も出会い学習や

体験学習を通して、児童の視野を広げていきたい。

「人の役に立つ人間になりたいと思う」児童は 97.3→97.1%(12月 横這い)
「将来の夢や希望がある」児童は 85.6→84.9%(12月 微減)
「自分にはよいところがある」76.5→78.3%(12月 微増)

(5) 特別支援教育の推進

・特別支援コーディネーターを中心とした校内体制にスクールカウンセラーも加わり、必要な子どもや保護者には適宜面談や支援会議を複数回行い、改善に繋げることができた。

「学校は楽しい」児童アンケート 93.7→94.4%(12月 微増)
不登校(30日以上)0→1名 長期欠席(10日以上)3→12名(ほぼ病欠)

4 健やかな心と体の育成

(1) 基本的な生活習慣の定着

・年3回校区で家庭学習・読書強化週間を設定した。チェックシートを活用し、家庭との共通理解を図り、基本的な生活習慣の定着と連携させた指導を行うことができた。しかし、家庭での過ごし方は、引き続き課題である。
・月1回程度、児童会主体のあいさつ運動を行った。

「睡眠時間をしっかりとることができている」89.2→85.9%(12月 微減)
「朝ご飯をほぼ毎日食べている」児童は92.8→96.3%(12月 微増)
「ゲーム・スマホ3時間以上」28.8→23.5%(12月 やや改善)
「あいさつを自分からしている」87.4→91.5%(12月 微増)

(2) 基礎体力の強化

・前年度の新体力テスト分析結果をもとに、体育の時間の最初に、計画的に全校共通した弱みを強化するサーキット運動を取り入れ、弱み改善をおこなった。引き続き柔軟性や瞬発力、巧緻性に課題がみられるものの、投げる力は、女子で大きく改善された。
・「わくわくタイム」や「冬の運動デー」などで、積極的に体を動かす機会を設けた。依然として、柔軟性や瞬発力に弱みがみられる。

(3) 縦割り班活動の推進と、人間関係や社会性の育成

・月1～2回の「わくわくタイム」、月1回の「児童集会」や毎日の清掃活動は縦割り班を使うことにより、学年外の子との触れ合いの場を設けた。
・校外学習等でインタビューを行う場を設け、全学年で会話を重視した活動を実施した
・お昼の放送で、インタビューコーナーでは児童がゲストとなって会話できる場を設けた。

「わくわくタイム」「集会は楽しいですか」満足度98.2→96.2%(12月 微減)
「学校は子ども主体の活動を大切にしている」100→97.5%(保護者12月 微減)

5 安全安心な学校づくり

(1) つながりを育てる学級づくり

・児童の自己肯定感・自己有用感を向上させることを意識して、寄り添い、教師と子どもの関係を築くことができた。
・情報交換等をこまめに行い、欠席理由の確認や問題行動などは、早期発見・早期対応に努め、基本は複数体制で組織的に対応することができた。

「学校は楽しい」1学期 93.7→94.4%(12月 微増)
「いじめが起こらないよう気を付けている」93.7→95.2%(12月 微増)

(2) 登下校の安全の確保

- ・定期的な通学路点検と、職員・保護者・地域によるパトロールを実施した。「椿っ子見守り隊」への登録や「8・3運動」の参加呼びかけを地域や保護者に行った。
- ・「子どもを守る家」の更新、依頼をPTAと協働して実施した。
- ・鈴峰中学校区の小中と連携し、交通指導、あいさつ運動を行った。
- ・地区児童会や交通安全教室を開催し、安全確保に向けた情報発信と指導を行った。
- ・メール配信等による「不審者情報」の的確な伝達を行った。

(3) 危機管理マニュアルの見直しと校内体制の整備

- ・危機管理マニュアルを定期的に見直し、教職員の危機管理意識の向上を図った。
- ・メール配信システムを活用した緊急引き渡し訓練を実施した。

6 地域とともにある学校づくり

(1) 鈴鹿型コミュニティスクールの推進

- ・学校運営協議会を年6回開催し、校内行事や授業参観をしていただき、学校としての強みや弱みを検討するとともに、地域・保護者との協働による学校運営を行った。
- ・校区で拡大運営協議会を持ち、中学校区としての課題の共有や情報交換を行った。
- ・校区の人権フォーラムに参加していただき、誰もが暮らしやすいまちづくりをテーマに地域の人権課題を子どもと一緒に考えた。
- ・学校自己評価と学校関係者評価を実施し、結果を公表した。

「学校は教育方針や活動内容、緊急連絡を伝えている」96.7→98.7%(12月 微増)

(2) 保護者や地域との連携

- ・教育活動への保護者・地域住民の参画を推進する。(各種ボランティア等)
- ・学校だよりを年36回程度発行し、情報提供を充実させた。
- ・学校アンケートを学期に1回調査することにより、現状の成果や課題を学校側が把握でき、結果を通信等で伝えることにより、学校課題を共有してもらうことができた。

「学校・地域・保護者との連携はうまくいっている」94.5→96.3%(12月 微増)

(3) 学習ボランティアの活用

- ・読み聞かせ(延74人)学習支援ボランティア(延18人)の活動回数の増加と運営委員長の働きかけもあり、登録者数が増加した。
- ・授業、クラブ、椿ワールドなどの行事、椿タイム(延37人)など地域Coと連携した適切な体験、学習ボランティアの活用により、行事の支援や充実につながった。

7 教職員の総勤務時間の縮減

(1) 職員会議の時間短縮

- ・提案内容や分掌での引継ぎ内容等クロームブックでデータ管理することで、時間短縮を図った。朝の打ち合わせも水曜日の放課後限定とし、情報共有をデータで行った。

(2) 校務の取り組み方の見直しと教職員の意識改革

- ・適所適材の校務分掌、行事や教育活動の焦点化、業務内容の精選・見直しを行った。

定時退校日の達成率	72→76%	(昨年度より改善)
60分以内に終了できた会議	50→69%	(昨年度より改善)
1か月の過重労働平均	22.3→21.0時間	(昨年度より改善)
1か年の一人当たりの休暇取得平均日数	22.7→19.9日	(約3日減)

Ⅲ 中長期的重点目標

1 学力の向上と指導の充実

学力を保障するため、授業改善のための方策を検討し、指導力の向上を目指す。

2 健やかな体の育成と豊かな心の育成

全ての活動の基盤となる健康な体を育成する。

非認知能力を育み、自他の大切さを認め、共に生きる力を育成する。

3 安全安心な学校づくり

安全・安心な学校をつくるため、安全管理と安全教育の充実・徹底を図る。

4 地域とともにある学校づくり

家庭・地域と連携して学校運営の改善と教育活動の充実を図り、「地域とともにある学校」を目指す。

5 働き方改革とコンプライアンス意識の向上

総勤務時間の縮減とコンプライアンス意識を高める取組を推進する。

Ⅳ 本年度の行動計画

1 学力の向上と指導の充実

(1) 自ら学ぶ力を育成するための授業改善

① 授業改善と指導力の向上

- ・鈴鹿市教育研究会の研究委託校として、授業研究の成果を発信する。
- ・研修課題に沿った授業改善に全員で取り組む。全教員が年間1回以上の研究授業の実施
- ・説明的文章を通して、国語力を身に付ける仮説・手立てを検証し、授業改善に生かす。
- ・課題をみつけ解決する過程を重視し、教師がめあて〈ゴール〉を明確にした授業に取り組む。日々の実践で、授業力 UP5 を活用する。
- ・授業に対する児童満足度90%以上を目指す。

② 基礎学力の定着と向上(既習事項の定着につながる学習指導)

- ・全校で取り組む授業開始時の「読み上げ計算」の活用
- ・4～6年生の椿タイム(前学年の補充学習)を年5回実施する。
- ・TT、複数配置による個別の授業支援
- ・ICT活用技能の向上と、タブレット端末による個別最適な学習を推進する。
- ・家庭学習の習慣化にむけた指導(家庭学習 UP5)および保護者への啓発に取り組む。

③ 全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェックの活用

- ・全国比(県比)平均+1.5を目標として、学力の向上を図る。
- ・全職員で調査結果を分析し、各学年に応じた弱みの把握と、課題克服に向けた授業改善を各学年で図る。

④ 言語能力・活用力の向上

- ・音読指導と既習漢字の習熟を図る。国語辞典は低学年から活用する。
- ・図書巡回指導員、図書委員会、図書ボランティアと連携し、新聞の活用や朝読書の継続を含め、全校で読書活動を推進し、読解力・表現力の向上を図る。貸出1人年75冊
- ・「ブックトーク」・「お話宅配便」・「味見読書」などの読書活動を年間18回以上実施

(2) 特別支援教育の推進

- ・TTや交換授業、合同授業などを行い、全職員で子どもを支える体制を整える。
- ・特別支援教育コーディネーターを中心とした支援体制のもと、週1回の打ち合わせで情報交換と共通理解を図る。必要に応じて適宜支援会議をおこなう。
- ・すずっこファイルを活用し、全教職員の理解をすすめる、スクールカウンセラー等と連携して具体的な支援の方策を探るなど、支援内容を充実させる。

(3) 多文化共生教育の推進

- ・全学年で外国語活動を推進し、異国の文化に触れるとともに、ジェスチャーや会話を重視した英語活動を実施する。1、2年生は月1回程度のEEタイムをおこなう。
- ・「椿ワールド」(英語活動)を開催し、英語の活用とともに表現力を身に付ける。
- ・外国籍の人々と積極的にコミュニケーションをとることができる機会を設定する。

(4) 総合的な学習・生活科・行事における非認知能力の育成、キャリア教育、情操教育の推進

- ・カリキュラムマネジメントをおこない、効果的なキャリア教育を行う。「すずか夢工房」や「ゲストティーチャー」の招聘を全学年、年間3回以上実施し、「生き方」や「考え方」を学ぶ機会とする。
- ・発達段階に応じ、地域と連携した事業を推進し、地域の一員としての自己有用感を築く。
- ・芸術鑑賞や、音楽鑑賞など文化に触れる機会を持ち、情操を育てる。

(5) ICT教育の推進

- ・計画的にICT支援員と連携を進める(月2回)
- ・授業の中で積極的に活用し、研修会等でも実践的な活用を広げていく。
- ・日常的な活用を進めると同時に、家庭学習と授業とのサイクルや校外連携等に活用する。

2 健やかな体と豊かな心の育成

(1) 非認知能力を育み、つながりを育てる学級、学校づくり

- ・気持ちに寄り添うことで児童との信頼関係を築き、かかわりを通して、個々の児童の自己肯定感・自己有用感を向上させる。
- ・縦割り班活動を推進し、人間関係や社会性の育成を図る。わくわくタイム(異年齢遊び)年15回、児童会主催による学校集会年6回、縦割り班清掃活動など。
- ・校区で連携して生徒指導・人権について教員研修会をもち、児童生徒についての情報交換を通して、中学校生活への不安を解消する。

(2) 体力、運動能力の向上

- ・新体力テストを全学年で実施し、分析による弱み(柔軟性・瞬発力等)に対する具体的な対応策を検討し、実施する。
- ・体育の時間の最初に、弱みを強化する「5分間サーキットトレーニング」を継続して行う。
- ・体を動かす活動や遊びの保障をする。わくわくタイム、体育委員会による運動デーなどを企画する。

(3) 基本的な生活習慣の定着

- ・年3回校区で家庭学習・読書強化週間を設定する。チェックシートを活用し、家庭との共通理解を図り、基本的な生活習慣の定着と連携させた指導を行う。
- ・年2回学校アンケートをとり、家庭での過ごし方を振り返る機会とする。
- ・児童会主体のあいさつ運動を適宜実施し、啓発を継続する。

(4) 学校生活についての満足度向上と不登校を生まない学校体制

- ・不登校を生まない取組に向け、職員が共通意識を持って対応する。欠席理由のあいまいな児童に対する家庭との連携を密にする。場合によっては児童・保護者のニーズに応じて別室登校や時間差登校、一部オンライン学習についても検討し、不登校0人、「学校が楽しい」児童の割合95%以上を目指す。

(5) いじめを生まない学校体制づくり

- ・アンケートによるいじめの把握(年3回)組織的な対応と指導と未然防止啓発活動の充実。
- ・いじめや問題行動の早期発見・早期対応に努め、基本は複数体制で指導する。「いじめ解決100%」を継続する。「いじめがないように行動できる」児童の割合100%を目指す。

3 安全安心な学校づくり

(1) 登下校の安全の確保

- ・校長・職員による登校指導、危険箇所等の通学路点検と、職員・保護者・地域によるパトロールを実施する。「子どもを守る家」の確認をPTAと協働して実施する。
- ・地区児童会において、安全確保に向けた情報発信と指導を行い、交通安全教室(自転車の乗り方指導)を全校で実施する。

(2) 防犯教育の充実

- ・「不審者」「連れ去り」等の防犯訓練を実施する。
- ・メール配信等による「不審者情報」の的確な伝達を行う。

(3) 危機管理マニュアルの見直しと校内体制の整備

- ・危機管理マニュアルを定期的に見直し、教職員の危機管理意識の向上を図る。
- ・校区安全安心マップを定期的に見直す。
- ・緊急時にはメール配信を活用した緊急引き渡しを実施する。

4 地域とともにある学校づくり

(1) 保護者や地域との連携強化

- ・PTAや地域の有識者メンバーで組織された学校運営協議会を年6回開催し、熟議により学校の課題を解決する。また、学校関係者評価をおこなう。
- ・学校だよりを年間36号以上発行し、ホームページも更新することで、情報提供を充実させる。生活アンケート(児童、保護者)の結果、読書・家庭学習強化週間の達成率、体力テストの結果、学習状況調査の結果等を分析し、改善策を提案していく。
- ・教育活動への保護者・地域住民の参画を推進する。

(2) 学習ボランティアの効果的活用

- ・読み聞かせボランティア、学習支援ボランティアを継続させる。
- ・適切な体験学習ボランティアの活用により、授業(ミシン、裁縫、調理等)、クラブ、その他の行事等の充実を図る。

5 教職員の総勤務時間の縮減とコンプライアンス意識向上

(1) 各種会議の時間短縮

- ・連絡・提案内容、引継ぎ文書等の情報共有についてクロームブックでのデータ管理を進める。職員打ち合わせは、クラスルームで各自確認し、週1回水曜日放課後の打合せを効率よく行う。会議は計画的に日程に組み込み、細かい時間設定をし、60分以内に終了する会議を目標70%とする。
- ・校務の取り組み方を見直しと教職員の意識改革を進める。教職員一人ひとりの強みを生かせる校務分掌を行うとともに、行事を精選し、業務内容の見直し、定時退校日の達成率80%を目指す。
- ・超過勤務時間を1か月45時間、年360時間以内とし、目標平均20時間を目指す。
- ・互いの健康を思いやり、できるだけ休憩や休暇を取りやすい環境を整え、一人当たりの休暇取得平均20日以上を目指す。

(2) 職員のコンプライアンス意識を高める。

- ・打合せ・会議等で随時、コンプライアンスについての話をするとともに、年1回以上のコンプライアンスミーティングを行い、不祥事の根絶に向けて職場全体で取り組む。